

# ブラジルの沖縄人社会再考

山城 千秋

## Rethinking Okinawan Community in Brazil

Chiaki YAMASHIRO

(Received October 1, 2010)

### 1. 研究の目的

本研究は、沖縄の同郷組織（郷友会）の形成と地域の共同性を明らかにする一連の研究の一部<sup>(1)</sup>であり、ブラジルの沖縄人社会の共同性と母県との関係について、再考することを目的としている。

沖縄県人 325 人を乗せた第一回ブラジル移民船「笠戸丸」が、1908 年 4 月 28 日に神戸港を出発し、約 2 ヶ月後の 6 月 18 日にサントス港に到着してから、すでに 100 年が経過した。一世紀にわたる「移民県沖縄」の歴史的体験は、近代国家に翻弄されながらも、幾度も切断された人と人の絆を紡ぎ直し、そこに国家を超える新しい社会形態を構築するものであった。

移民という人の移動は、国境を越える。生まれ育った土地の文化を持って、人は移動する。たとえそれが国家政策による余剰労働の排出であろうと、いつしかその土地の文化へと染まっていく。しかし、それは自由につながり、生活のなかで様々な形に変化しながら、自らのアイデンティティーの基盤へと変容していく。それが、移民によるコミュニティの形成となり、世代を超えて継承されているのである。

世界最大の県系コミュニティであるブラジルの沖縄県系人は、ブラジルの日系人の 1 割に当たる約 169,000 人を占める。一世紀を経て若い世代になるほど、沖縄人のアイデンティティーが薄れていくのは自然なことである。ただ絆が切れることはない。移民の体験を振り返ると、異国での苦境を乗り越えるために、人々は支え合い、助け合ってきた。その相互扶助の精神に裏付けられた人間関係があったからこそ、今日のような沖縄人ネットワークが生まれたと言える。

また、移民先で「チムグクル（思いやり）」や「ユイマール（助け合い）」といった言葉が日常的に聞かれる。移民たちによる戦前の母県への送金や戦後の救済活動、そして今日の相互交流を考えると、移民先と沖縄の関係もまた相互扶助でつながっているのである。

本研究では、ブラジルの沖縄人社会で、どのような

相互扶助が行われ、人間関係を形成しているか、そして母県・母村とのつながりを明らかにするために、質問紙調査および移民 100 周年記念事業への参与観察を通して、分析と考察を試みる。

移民先で世代を重ね、混血が進むなかで、若い世代における沖縄人としての意識は、確実に薄れつつある。芸能や文化を学ばせることで沖縄人意識を高める努力もなされている。しかし、沖縄人意識の希薄化は、移民先だけでなく、「本家」である沖縄でも起こっている。国策に絡み取られたグローバル資本主義の潮流は、地域性を超越して言葉や生活習慣の均一化を生み出し、このままでは沖縄が日本の一地域となることは容易に想像できる。

沖縄人として生きることを意味を、移民先の沖縄人社会から問い直し、相互扶助による新たな社会の可能性を再考したい。移民は過去の物語ではない。助け合いながら共に生きてきた移民の体験は、現代日本社会が抱える様々な問題に一つの答えを示していると考えられる。

### 2. ブラジルの沖縄移民に関する先行研究の検討と本研究の視角

#### (1) 沖縄に関する移民研究の動向

沖縄移民に関する本格的な研究は、田里友哲、石川友紀ら琉球大学法文学部地理学教室による南米研究がまず筆頭にあげられる。同研究室は、1975 年より文部省の科学研究費による海外学術調査の共同研究を手始めに、多数の報告書および論文を発表している。ブラジルの移民研究に限ってみるならば、石川友紀・島袋伸三による「予備調査報告」『琉球大学法文学部紀要』（史学・地理学篇、第 22 号、1979 年）、それに続く本調査『南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究Ⅱ－ボリビア・ブラジル－』（琉球大学法文学部地理学教室、1986 年）が代表的なものであり、地理学という視点からの集住地の形成過程や、職業変遷など、移民社会の解明を通して、沖縄の地域社会的特性を明

らかにしている。

沖縄国際大学の棚原健次は、「移民に関する心理学的研究－特にブラジルにおける沖縄系移民を中心に－」『沖縄国際大学文学部紀要』（社会科学篇、第7巻1号、1977年）などを発表し、なかでも「南米ブラジルの沖縄系一世移民」沖縄心理学会『沖縄の人と心』（1994年）では、家族関係と教育、精神的身体的健康度など心理学的分析を試み、ブラジル社会への適応性と創造性を指摘した。

琉球大学移民研究センターは、2003年に設立され、これまでの研究蓄積を継承し、沖縄における移民研究の中心的役割を担っている。ブラジルをはじめ世界各地の沖縄県出身移民に焦点をあて、また母県・沖縄による「世界のウチナーンチュ大会」の分析など、県系ネットワークに関する研究成果を年報『移民研究』に記している。

研究論文以外にも、県・自治体による移民関係の文献は多い。主なものを列挙すると、『沖縄県史・第7巻移民篇』（1974年）をはじめ、『宜野座村誌・資料編1 移民・開墾・戦争体験』（1987年）、『国頭村海外移民史』（1992年）、『金武町史・1 移民』（1996年）、『北中城村史・3 移民』（2001年）、『西原町史・資料編5 西原の移民記録』（2001年）、『具志川市史・4 移民出稼ぎ』（2002年）、『大里村史・移民』（2003年）、『佐敷町史・5 移民』（2004年）、『玉城村史・7 移民編』（2005年）、『北谷町史附巻・移民・出稼ぎ編』（2006年）、『南風原町史第8巻移民・出稼ぎ編』（2006年）、『名護市史本編5・出稼ぎと移民』（2008年）などが編纂され、海を渡った同郷人を記録する取り組みが、自治体史の重要な一領域として位置づけられている。

また、字誌においても、移民を多く送り出した地域では、移民に関する記述が盛り込まれ、なかでも国頭村比地の『南米比地移民誌』（1980年）は、南米の比地出身者の移民生活を調べまとめた、地域にとって大事なことを綴った字誌となっている。

その他に、沖縄タイムス社『新沖縄文学：総特集・沖縄移民』（1980年）や、琉球新報社『世界のウチナーンチュ』（ひるぎ社、1986年）、宮城松成『忘れ得ぬ人々－ブラジル沖縄移民の秘話』（沖縄タイムス社、2006年）などの書籍や、新聞・メディア等の報道によって、ブラジルや沖縄移民に関する情報は、今日的関心事として広く受け入れられている。さらには、学校教材として、第4回世界のウチナーンチュ大会実行委員会『参加型学習教材・沖縄移民』（2006年）も作成されている。

## （2）ブラジルにおける沖縄移民研究

ブラジルの日系社会を中心に、研究を続けるサンパ

ウロ人文科学研究所でも、数多くの沖縄移民社会に関する論文があり、なかでも森幸一（サンパウロ大学）が長年携わってきた。「戦後における沖縄系移民のエスニック職業としてのクストゥーラ（縫製業）－ミドルマン・マイノリティーへの道－」『人文研』No.1（1998年）、「沖縄県移民の経済的適応戦術と都市エスニック・コミュニティの生成－サンパウロ市『カロン』地区の沖縄系エスニック・コミュニティの事例－」同左、No.5（2001年）があり、ブラジル定住者の視点から詳細に分析された論文である。

ブラジルに渡った沖縄人たちもまた、自らの歴史を綴り、記録に残すことを行ってきた。ブラジル沖縄県人会に関する文献・記念誌には次のようなものがある。在伯沖縄協会『うるまの世あけ』（1973年）、在伯沖縄県人会『移民70周年・創立25周年・会館落成記念誌』（1979年）、『ブラジル沖縄移民誌』（1987年）、『沖縄県人ブラジル移住80周年・在伯沖縄県人会創立50周年記念誌』（1988年）、ブラジル沖縄県人会『ブラジル沖縄県人移民史－笠戸丸から90年』（2000年）、『ブラジル沖縄移民百周年記念』（2010年）。それぞれの記念誌には、その当時の県人社会の様子や活動などが詳細に記録され、貴重な資料となっている。2000年に発刊された移民史は、これからの世代のことも考え、ポルトガル語に翻訳されている。

郷友会・支部に関する記念誌も、近年顕著な出版が相次いでいる。郷友会では、在伯具志川市民会による『ブラジル在具志川市民の実態』（1989年）は、旧具志川市出身者を悉皆調査し、全世帯・全世代を記録したものである。在ブラジル小禄田原字人会『小禄田原移民80周年記念誌1917-1997』（1997年）は、旧小禄村小禄田原出身者の記録で、具志川市民会と同じく、全員の名簿掲載のほか、記念式典の記録、寄稿、座談会などが掲載されており、「もう一つの小禄田原」の字誌となっている。その他郷友会関係では、在伯金武町人会『金武町人着伯90周年・在伯金武町人会創立30周年記念誌』（2002年）、ブラジル読谷村人会『ブラジル読谷村人会のあゆみ1969-2007』（2007年）などが刊行されている。

県人会支部では、ブラジル沖縄県人会マウア支部『沖縄県人会マウア入植71周年・ブラジル沖縄県人会マウア支部創立56周年記念誌・あゆみ1945-2001』（2001年）、沖縄県人会サント・アンドレー支部『沖縄県人会サント・アンドレー支部－創立から45年－1955-2001』（2003年）、ブラジル沖縄県人会ビラ・カロン支部『創立50周年記念誌』（2008年）がある。支部の記念誌は、彼らが形成した地域社会の字誌に相当するもので、入植からの歴史、文化が詳細に記録されている。一世の記憶と移民の歴史を後世に残すことは、

時代を経ても、自らのルーツとアイデンティティーを確かめるために、どうしても取り組まなければならないものとして、総世代的に認識されている。

ブラジルの沖縄移民に関する研究・文献は、立ち位置も研究手法も多種多様であるが、共通した枠組みとして考えられることは、母県の沖縄社会と異国の移民社会の同質性を追求していることにあり、捉えられる。つまり、「移民社会は母県（母国）の習慣や文化を純粋培養する」（大城常夫）という仮説を論証することが、沖縄移民研究の特徴なのではないか。

したがって、沖縄移民社会の研究では、移民を送り出した母村・母県と関連づけて論ずることが必要である。しかし、「移民社会の中の沖縄」を論じたものはあっても、母県との共同性、さらには文化の担い手形成という教育学的視点からの「移民社会と沖縄」研究は、管見の限り、まだ明らかにされていないテーマであり、本研究の果たす役割であると考えている。

### 3. ブラジルの沖縄移民社会の実態

人間は、文化との交渉のなかで自己形成する存在である。文化を創造し、創造した文化によって人間は生かされるという相互依存が前提になっていることから、文化を生かすも殺すも、伝えようとする人間の意識のあり方次第であると考えられる。そこで、ブラジルという異文化のなかで、沖縄移民社会では、どのように沖縄文化を伝承しようとしているのか、そして社会教育の課題である文化の担い手形成は、異文化のなかでどのような様相をもつものなのかを考察していく。

本調査は、2006年9月21日～29日と、2007年9月25日～10月5日の2年にわたって、主に一世を対象に県人会館および各支部会館において、項目の読み上げをしながら各自質問紙記述する方法で実施した。日本語の読み書きが不慣れになった人には、面接調査を行い、代筆を行った<sup>(2)</sup>。

#### (1) 沖縄県人の移住形態

調査では、108人（男性83人、女性25人）から回答を得ることができた。出身地別の内訳は表1の通りで、後述する郷友会・字人会の有無についても示した。回答者の80%を占める86人が一世で、22人が二世である<sup>(3)</sup>。

回答者の平均年齢は、76歳で、戦前の1944年までに生まれた方は、88人で81.5%となっており、最年長は1917年生まれの男性である。最終学歴で比較すると、高等学校卒28.7%、旧尋常小学校・旧高等小学校卒24.1%、中学校卒20.4%、大学卒10.2%となってい

表1 回答者の出身別人数と郷友会

市町村名	回答者	市町村郷友会	字人会名
国頭村	2	○	
大宜味村	2	○	
名護市	3	○	仲尾次、久志
本部町	1	○	
今帰仁村	17	○	
伊平屋村	1	○	
金武町	8	○	
宜野座村	1	○	
恩納村	1	○	
具志川市	5	○	具志川
沖縄市	2	○	泡瀬
嘉手納町	1	○	
読谷村	11	○	
中城村	2	○	
西原町	1	○	
浦添市	5	○	
那覇市	8	○	小禄田原、大嶺
糸満市	6	○	真壁
佐敷町	7		
知念村	1	○	
大里村	1		
具志頭村	5	○	
東風平町	1		
久米島町	1	○	
石垣市	1	—	
大阪府	1	—	
ブラジル	13	—	
合計	108		

表2 一世の職業

職業	人数	職業	人数
縫製業	3	美容師	1
化粧品店	2	洋服店	1
県人会職員	2	レストラン	1
露天業	2	貿易	1
事務員	1	看板業	1
電気業	1	金物店	1
団体役員	1	旅行社	1
会社員	1	体育館管理	1
建設資材店	1	日本語教師	1
歯科医	1		

る。渡航時の平均年齢が、20.8歳であることから、戦前、戦後を通して沖縄で義務教育まで修了した人がほとんどであると言える。なお大学卒者は、その多くが二世となっている。

職業については、定年退職者が50.0%、現在も働いている人が43.5%であり、表2に具体的な職業を示したが、主に商店など自営業を営んでいることがわかる。

沖縄を離れてブラジルに渡った時期については、1944年までの戦前が8.3%、終戦後から移民が増加し

表3 移民の主な理由（自由記述）

No.	性別	出身地	離沖年	年齢	理由
1	男	浦添市屋富祖	1952	13	家族構成の一員で、父母は苦しい生活を抜けて大地に夢を見ていたと思います。
2	男	浦添市内間	1961	17	家族構成の一員で、大地に夢をいっていた。
3	男	浦添市前田	1958	21	米軍の軍攻に反発心で出てきました。
4	男	浦添市大平	1958	20	家族が戦争で亡くなり、おもしろくなかったため、米軍統治への反発。
5	男	浦添市牧港	1960	21	米軍統治下に将来に見切りをつけ将来に望みを託して。
6	男	糸満市真壁	1957	21	農業を目的に
8	男	糸満市潮東	1960	23	呼寄せ
9	男	糸満市米須	1958	30	よりよい生活を求めて、自由な新天地で働いてみたかった。
10	男	糸満市米須	1961	29	ボリビヤ
11	男	糸満市米須	1957	26	沖縄産業開発青年隊（3次）
12	男	金武町金武	1972	12	戦争回避と大陸への希望
14	男	金武町金武	1961	10	家族に伴って
15	男	金武町金武	1967	28	ファゼンテーロの夢
17	女	金武町金武	1962	27	花嫁移民
18	男	金武町並里	1970	20	琉球大学英語英文学科卒業、米国留学を目指していたが、その制度が廃止になった為、南米に一挙に飛んだ。
19	女	金武町金武	1972	15	両親に伴って来伯する。
20	男	金武町金武	1961	22	青年隊
23	女	佐敷町新里	1959	32	呼び寄せ。夫は中国に出兵、3年後に帰る。沖縄では土地もないし、子どもの成功のために行こうと夫が決めた。
24	男	佐敷町津波古	1957	27	親の呼び寄せ
25	女	佐敷町津波古	1955	11	母・姉と3人でおじの呼び寄せ
26	男	佐敷町津波古	1956	22	親に呼ばれて（親は戦前移民）
27	男	佐敷町新里	1953	14	新しい夢を求めて。
28	男	国頭村鏡地	1959	36	呼寄移民（叔父より）
29	女	羽地村仲尾次	1959	12	呼び寄せ
35	男	那覇市小禄	1937	9	家族がブラジルに移民したために。
37	男	那覇市小禄	1954	14	子どもの教育のため。
41	男	読谷村都屋	1960	21	青年隊を卒業したので自然に海外へ行く決心をする。
42	女	読谷村波平	1955	23	呼び寄せ移民
43	男	読谷村儀間	1960	32	農業移民
44	男	読谷村宇座	1960	20	農業
45	女	読谷村儀間	1963	23	目的も何もなく長男が希望したからついて移民しました。
46	女	読谷村儀間	1960	10	移住（農業移民）
47	男	読谷村渡慶次	1960	21	農業移民
48	男	読谷村瀬名波	1962	12	ボリビア国に両親に連れられて。
49	男	具志川市具志	1957	28	出稼
50	男	具志川市具志	1959	16	呼寄移民
51	男	具志川市具志川	1958	35	旅費貸し付け移民（日本政府から借りて）
53	男	具志川市兼ヶ段	1954	16	家族が戦後の苦しい生活から、より良い将来への生活を希望して移住した。
54	女	具志頭村破名城	1956	34	呼び寄せ
56	女	具志頭村破名城	1959	21	呼び寄せ移民
58	男	具志頭村後原	1954	19	契約移民
59	男	沖縄市明道	1957	20	より良い生活にするため、大農業をするため。
74	男	今帰仁村運天	1933	28	親戚をたよって来た。
75	男	国頭村辺土名	1958	2	兄弟が多く貧乏でいたので外国に希望を抱いて渡伯した。
76	女	大宜味村塩屋	1973	34	大志を抱き、広大なブラジルに魅せられた。
77	男	大宜味村田嘉里	1958	20	大陸で大農業・大農園主を夢見て移住。
78	男	名護市名護	1973	40	経済不安（ボリビアから再移住）
79	女	名護市伊差川	1940	19	夫の呼び寄せのため
80	女	名護市久志	1940	15	戦争逃れのため
81	男	今帰仁村平敷	1957	19	永住
82	女	今帰仁村平敷	1930	8	叔母に連れられて（養女）
83	男	本部町古島	1970	23	ボリビア移民（7次）。よりよい生活を求めて

No.	性別	出身地	離沖年	年 齢	理 由
84	男	伊平屋村我喜屋	1958	26	ブラジルに行けば広大な土地がもらえ、そしてその土地にゴム植林をするため。
85	男	恩納村恩納	1969	29	沖縄で米軍に使われるのがいやで、1959年に第7次移民で家族で移住しました
86	男	宜野座村松田	1957	15	金儲けのため（生活をよくするため）
89	男	嘉手納町久得	1961	20	農園経営
90	女	読谷村波平	1964	32	親に呼び寄せされました
91	男	読谷村牧原	1958	25	海外にあこがれて
92	女	読谷村牧原	1961	21	家族移民
95	男	中城村登又	1959	24	長男は両親と共にという習わしのために
97	男	那覇市小禄	1955	6	おじいの呼び寄せ
98	女	那覇市小禄	1957	27	よりよい生活を求めて
99	男	佐敷町津波古	1962	27	大農場主を目指して
100	女	大里村	1973	40	ボリビアより再移住
101	男	知念村	1969	18	ボリビア国から再移住。よりよい生活を求めて
103	男	東風平町後原	1961	21	沖縄産業開発青年隊員として
104	女	石垣市新川	1982	34	結婚

始める1955年までは、11.1%、そして、米軍統治時代の1956年～1966年の10年間では、54.6%もの人がブラジルに移民している。

その移民の際の構成は「単身で」18.5%、「家族全員で」64.8%となっており、単身者の場合は、移民青年隊や親類による呼び寄せで渡伯している。移民の理由については、表3の自由記述に示すように、大別すれば「海外雄飛」と「呼び寄せ」に分けられる。家族とともに農業移民をめざす者や、米軍への反発から沖縄を離れた者など、終戦後の米軍統治による土地接収や生活・経済の貧窮という、当時の沖縄が置かれた厳しい社会現実を反映した理由となっている。

また、渡伯の場合に誰を頼ってきたのかを尋ねたところ、「親戚」37.0%、「家族・兄弟」22.2%と、半数が身内を頼っての移住である。その他に、移民青年隊や琉球政府によるボリビア計画移民<sup>(4)</sup>などの回答も13.9%あった。

次に、ブラジルでの職業的生活についてである。入植した沖縄人は、まず自分の地縁、親戚や親族を頼って生活していることから、彼等と同じ職場・職種で働くことになる。61.7%の人は、サンパウロ州やパラナ州の農場で農業に従事し、コーヒーやバナナ、野菜などの栽培を行っていた。残りの16.3%が縫製業などの製造関連、11.6%は市場などでの商業に従事していた。これは、戦前移民のほとんどが農業であったが、その後不作の農業から離れ、都市に移動して商業に転業していたため、4割は農業以外の職種に就いている。

都市に移動し、商業に転業することは、農業よりも経済的に生活がよくなることを期待すると同時に、子どもの養育や教育が主な動機となっている。そのため、回答者もその後の転業では、縫製業などの製造業が38.4%、市場労働や商業に従事する人も25.6%と約2

倍に増え、農業を継続したのはわずか3.5%であった。その他に、日本への出稼ぎ経験者が7.0%あった。このような農業から商業への転業は、県系人の都市集中と子弟教育の充実をもたらすことになった。

戦後沖縄移民の特徴は、米軍統治による将来への不安や土地強制収用、戦争孤児の問題など、戦争と米軍支配という抑圧からの解放をめざしたものであるといえよう。また戦後移民は、戦前のような出稼ぎ移民としてではなく、定住を希望した者が多かったのも特徴である。言葉も文化も分からない異国で、彼等が最も頼りにしたのが、地縁・血縁であり、このことが結果的に他の都道府県にはみられない相互扶助の機能をもつ県人会組織を生む基礎となり、県人会が中心となって、さらに、県民が県民を呼び寄せる移住の姿がみられたのである。

こうして異文化接触を経ながら、沖縄人はブラジルへの定住を果たしていくことになるが、同化と異化のはざまで、沖縄で習得してきた歴史・文化事象は、どのように伝承され変容し、受け継がれていったのか。次に、沖縄の文化伝承について考察を試みる。

## (2) 沖縄文化の伝承と変容

文化をもつということは、同時に言語をもつということであり、言語が民族を表す一指標であることから文化と不可分の関係にあると言える。文化の伝承は、言語によって行われ、コミュニケーションも言語を媒体とする。社会言語学者の田中克彦は、「一まとまりの言語共同体があるから一つの単位をなす固有語が話されており、固有語があるから、その固有語を共有する一まとまりの言語共同体が成り立っている」<sup>(5)</sup>として、人間集団を規定する言語の役割について述べている。沖縄および沖縄移民社会においても、共通の固

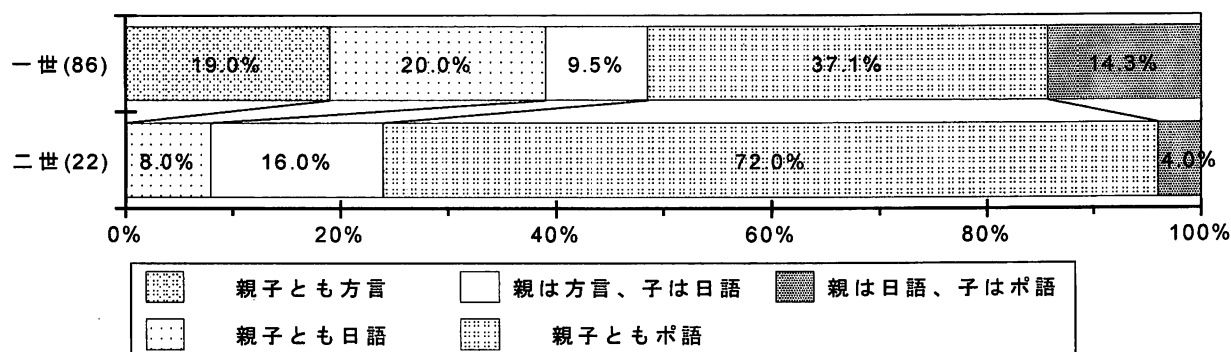


図1 家族間の言語

有語、琉球語（方言）が文化を伝える重要な要素であると考え人は、少なくない。それは、「具体的言語として精神の極限まできこまかく表現しう唯一の生きた言語」<sup>(6)</sup>として、琉球語が生活・文化・芸能と密接に結びついていることにある。

現代の沖縄では、琉球新報社の県民意識調査によると、県民の94.3%が沖縄文化を誇りに思い、同時に90.3%が方言への愛着を持っているとの結果がある<sup>(7)</sup>。実際に方言を使いこなせるのが52.6%と半数しか満たなくなっただにもかかわらず、愛着があるというのは、生活や文化・芸能においてなお方言が重要な要素を占めているからであると思われる。

では、日常的言語としてポルトガル語が使われるブラジル社会の沖縄人たちは、どのような言語を主に使うのか。まず、家族関係における日常的な言語についてである。複数回答で答えてもらったものを一世と二世に分けて示したのが図1である。一世の家族では、まだ「親子ともに方言を話す」が19.0%なのに対し、二世家族では、皆無であった。最も多かった回答は、一・二世どちらも「親子ともにポルトガル語を話す」となっており、次いで、一世が「親子ともに日本語」20.0%、二世では「親は方言で子どもは日本語を話す」となっている<sup>(8)</sup>。

いったん家を出ると、そこはポルトガル語しか通用しない社会であり、またブラジルで教育を受けた子弟との会話も、定住期間が長くなれば長くなるほど、現地語化していくことは必然であるといえる。しかし、筆者の調査過程では、集まった方々が方言で会話することの方が多く、むしろ県人一世としての筆者の語学不足を指摘されるほど、方言で話されることの方が多かった。沖縄人同士集まる場で、自然に方言が語り合われる光景は、生きた言語としての方言の価値を認識させるものであるが、前述の結果のとおり、二・三世への伝承は日本語以上に難しいことが推測される。

方言は、それを話す他者の存在がなければ継承が難しいし、体験してすぐに身に付くものでもない。言語

が文化を支え、文化が言語の質を保障するならば、古い世代と若い世代との間の文化価値の断絶をどう埋めるかが焦眉の課題である。その方言について、「子や孫に教えたことがあるか」との問いに対し、一世では72.1%、二世でも59.1%となっており、いずれも次代に伝えていきたいという意志は強い。

それでは、体験によって伝えられる沖縄の歴史や習慣、伝統的な行事などの伝承はどうだろうか。「沖縄の歴史、習慣、伝統的な行事について、子や孫に教え、伝えたことがあるか」という質問に対し、91.7%が「ある」と答えている。なかでも正月やお盆などの年中行事や冠婚葬祭は、44.4%が沖縄方式、45.4%がブラジル・沖縄の両方を取り入れていると答えている。たとえば、クリスマスはブラジル式、正月は日本式というように、双方の文化をうまく取り入れている。

その年中行事や冠婚葬祭の今後のあり方について、どのように継承してほしいか尋ねた結果、「子や孫の時代になったら、沖縄の習慣にこだわらず、子や孫のやりたいようにさせるべき」が51.9%で多く、「子や孫の時代になっても、沖縄の習慣通りにすべき」が38.0%となっている。

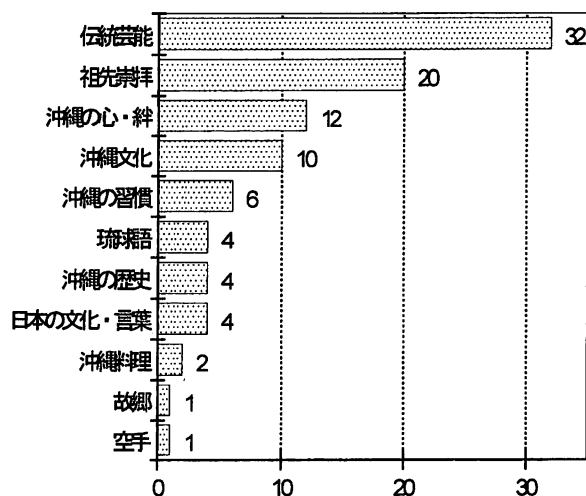


図2 後世に伝えたい沖縄文化の内実

沖縄の歴史・文化のなかで具体的に伝えたい内容について複数回答で答えてもらったところ、図2のような結果となっている。回答者のなかで最も関心の高かったのが「伝統芸能」で32人、次いで「祖先崇拜」20人、以下「沖縄の心・絆」「沖縄文化」となっている。祖先崇拜を継承して欲しいとの思いは、トートーメー（位牌）の価値をどう伝えるかにかかっている。トートーメーを継承するのは、必ずしも沖縄人夫婦とは限らないことが起こっており、世代交代が進むなかで大きな問題になりつつある。

### (3) 県人組織における活動と維持可能性

沖縄人の多くが、ブラジル各地に組織された県人会支部に所属し、一方で故郷を同じくする人々で組織された市町村人会・字人会にも所属している。このことは、ブラジルの県人に限らず、沖縄県内外をはじめ、世界の移住地において見られる。その数は、国内に106会、海外では24カ国66地域に組織されている。しかしそれらは、居住地を問わない、属人的組織であるのに対し、ブラジルの場合は、県人会支部が属地的に組織されていることが、他の国には見られない大きな特徴である。

回答者のなかで県人会支部に所属している人は、94.4%を占め、県人が暮らす地域にはほぼ支部が組織されているといっていよい<sup>(9)</sup>。また、出身地毎の市町村人會には、85.2%が、そして字人會では、今回の回答によって、糸満市真壁郷友會、名護市仲尾次郷友會、那覇市小禄・田原字人會、具志川市具志川同志會が活動していることが分かった。一方のブラジル日本文化協會（日本人會）にも入会している人は、11.1%となっている。

こうした属地的・属人的組織に参加する回答者は、日頃どの程度沖縄人とのつきあいがあるかを尋ねると、「いつも」76.9%、「ときどき」16.7%と答えている。沖縄人同士のつきあいよく見られるのが模合であるが、それについても81.5%がしたことがあると答えてい

る。ただし、ブラジルでは多くの「模合崩れ」や生活の安定化によって、近年では沖縄のように模合をすることはあまりないという。

それでは、こうした沖縄人同士の活動にはどの程度参加しているのか。図3は、各組織への参加度を表したものである。「いつも」参加する割合が5割を超えているのは、県人会支部と市町村人會となっているが、字人會の場合、組織がないところがあるため、必ずしも参加度が低いとは言えない。

各支部では、婦人會や老人會の活動が行われており、行事としては、定期總會、運動會、敬老會、演芸會、忘年會、新年會、カラオケ大會など多彩な行事が行われている。支部が属地的組織であり、また公民館としての支部會館をもつことなどが、年間を通した活動を可能としている。

一方の市町村人會と字人會は、属人的組織であるために、母村からの來客の際に集まったり、定期的には新年會や敬老會などを行っている。集まる機会は、支部よりも少ないものの、同郷であることを唯一の絆として活動している。なかでも金武町人會<sup>(10)</sup>は、近年二世の若者が町人會の担い手として活躍し、世代交代が順調である郷友會である。毎年の行事として、新年會、ボウリング大會、ピクニックを開催していたが、2006年7月には母村の祭りに感化された若者が中心となって「第1回金武町祭」を開催している。現在では、青年部に30～40人の20代の若者が参加し、會報の作成なども日本語で行っている。

こうした母村・金武町を核としたつながりが二・三世に継承されていることの最大の理由は、母村が行っている「海外移住者子弟等研修生受入事業」の効果が大きいと、池原豊會長は言う。研修に行った若者が町人會に参加することで、これまで関わってこなかった町出身の若者も呼び込むことになり、それが町人會の活動につながっている。金武町人會の実践は、市町村人會に二・三世をどのように関わらせるか、という共通の課題に対して、新たな展開策を示している。

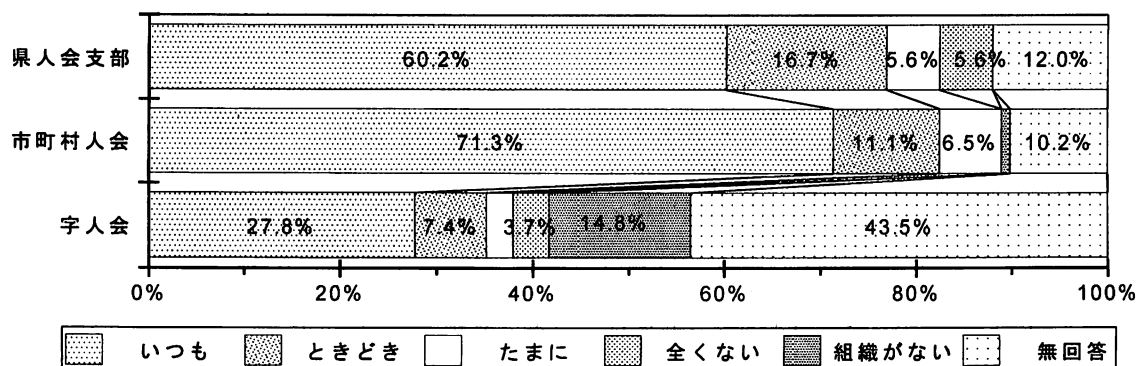


図3 各組織への参加状況

では、二・三世にあたる子や孫は、沖縄人組織の活動や事業の現状について、どの程度関心を持っているか尋ねたところ、子どもの場合「非常に関心がある」と思う人は23.1%、孫になると7.4%とずいぶんと低い回答になっている。「少々関心がある」は、子ども53.7%、孫22.2%となっているが、全体として沖縄人組織活動への二・三世の参加が難しいという印象は、一世に共通した認識であると考えられる。

回答者らは、約20歳でブラジルに渡り、半世紀あまりブラジルで暮らしている。生活年数は、沖縄のそれを上回っており、ブラジル社会への適応・同化を日々体験してきたといえる。そうした彼等の沖縄人意識とはどの程度あるのか、率直に聞いてみた。「沖縄人」と回答した人は、49.1%、次いで「日本人」20.3%、「日系人」と「日系人でもあり沖縄人」が7.4%となった。ところが、二世に限って見るならば、「沖縄人」と答えた人は、77.3%に達している。ブラジル生まれの県系人に、強い沖縄人意識が形成されていることは、沖縄への関心を引き出す県人会支部や市町村人会の活動への参加が、大きく作用していることと無関係ではないことは明らかである。

#### (4) 沖縄と移民社会の共同性の構築

最後に、市町村人会の活動や母県・沖縄について、自由記述で回答してもらい、その結果を表4にまとめた。まず、各市町村が独自に行っている海外移住者子弟研修制度については、2003年度の実績によると、国際交流・協力事業を行っている41市町村のうち、18市町村が実施している。

本制度に関しては、肯定的な意見が多く聞かれた。たとえば「浦添市の南米研修生受け入れ制度により、研修生の成果が活かされ、現在若いリーダーシップを担いつつあり、ぜひ継続して欲しい」(No.2: 浦添市出身)、「沖縄の伝統を伝えたいけど、二・三世に言葉では通じない。しかし、研修制度があるおかげで変わりつつある。こういう母県との経験は大事なので、ホームステイなどをやってほしい」(No.12: 金武町出身)、「県においては、県費留学生、研修生の制度を続けてほしい。南城市においては、昨年初めて研修生を送りましたが、今後も是非続けてほしいです。今の子どもたち(小学・中学生)は、日本にすごく関心があり、日本語を勉強する子どもたちが多くなっているように思います」(No.92: 読谷村)などのように、沖縄での生活経験をもたない世代に対する研修制度は、その後の移民社会の継承者育成の意義を担っている。

しかし、一方で「1991年から研修制度が10年くらいあって、2人くらい行っていましたが、打ち切られています。それが復活してくれたらなと思います」

(No.11: 糸満市出身)のように、財政難から事業を打ち切る市町村も現実としてみられる。

それから、「世界のウチナーンチュ大会」に関する意見も多く見られた。「世界のウチナーンチュ大会」とは、1990年から5年ごとに県が主催している行事であり、県人会と母県との絆に関するイベントは、全国的にも珍しい。第4回を迎えた2006年は、次世代育成を目標にすえ、さらなる海外県系人とのネットワーク拡大をめざし、世界21カ国2地域から約4,400人が、そのうちブラジルからは約450人が母県を訪れた。同大会は、世界のウチナーンチュを母県・母村を核とした重要なネットワークに位置づける意義を持っており、今後、世代交代が進むにつれてますます重要な役割を担うことが期待されている。

ブラジルの県人にもその要望は多く、「ブラジルと母県との交流をさかんにして、伝統文化の継承を守り、子孫にウチナーンチュの誇りを持ち続けていただきたい。問題点は、世代交代(三、四、五世)のウチナーンチュ意識が薄れる可能性がある」(No.53: 具志川市出身)、「母県の総ての文化や、その活動のため、ウチナーンチュ大会は継続してもらい、出来得れば、国廻りで行っては何如」(No.43: 読谷村)などの意見があがっている。

また、異なる意見として、「ブラジルも移民が来て100年もなるので、二世・三世を受け入れてもらうだけじゃなく、ブラジルも制度を設けて、沖縄県の若者を受け入れるべき」(No.95: 中城村)という、沖縄の若者にも移民社会に関心を持ってもらう必要性を訴えている。

これらの回答は、彼等が沖縄人であることに誇りを持ち、その誇りを次代へ受け継ぐことへの危惧と可能性を示している。彼らの誇りとは、文化に根ざしたローカル・アイデンティティを意味し、また沖縄で培った文化を異文化の受容のなかで伝えていく覚悟でもある。文化価値の継承・創造・伝承は、必ずしも思い通りに遂行されるとは限らない。これは、社会教育にとって世代論の問題と結びつき、日本の地域づくり・人づくりを持続可能にする教育の課題である。

それらの課題に対し、手がかりとなり得るものとして、沖縄とブラジルの若者に受け入れられている伝統芸能があげられる。特にエイサーのような青年集団に依拠した芸能では、毎年のように若い世代が加わり、地域に暮らす若者が担い手となる。ブラジルにおいても、琉球國祭り太鼓やレキオスといった沖縄に本拠を置く太鼓集団が、海外に支部をもち、沖縄文化の実践としての太鼓やエイサーで若い世代の人気を集めている。芸能は、言語(方言)をはじめ歴史、文化と深く結びつき、沖縄理解のための教育実践として捉えるこ



表4 郷友会および母県・母村に対する意見

No.	出身地	自由記述
2	浦添市	浦添市の南米研修生受け入れ制度により研修生の成果が活かされ、現在、若いリーダーシップを担いつつあり、是非継続してほしい。
5	浦添市	研修制度を継続してほしい。
6	糸満市	郷友会はこれからも繁栄していったと思います。
8	糸満市	当ブラジルに於いてウチナンチュの活動は活発におこなっている。ウチナンチュぬ肝心の能力・魅力のあること、今は他の県人からはマンモス県人会と呼ばれる様になっている事、沖縄の皆さんにもよく知ってもらいたい。
9	糸満市	母字から慶祝使節団で来訪する折、その出身者による歓迎や親切な対応が要求される。母村・母字との親善交流は不可欠で一方通行の交流では真の交流にはならないので是非子孫にもその習慣は育てていきたいものである。
11	糸満市	1991年から研修制度が10年位あって2人位行っていましたが打切られています。それが復活してくれたらと思います。
12	金武町	沖縄の伝統を伝えたいけど二・三世には言葉では通じない。しかし、研修制度があるおかげで変わりつつある。こういう母県との経験は大事。ホームステイなどやってほしい。
15	金武町	研修制度は、将来もうずっと続けてほしい。子や孫のために。そして金武町人会の中心となる2・3世の若者たちを育成するためには、大変よい制度だと思います。たとえ合併したところがあつたとしても、当山久三氏の思いをずっと町人会に生かすためにもこの制度は続けてもらいたい。
17	金武町	研修制度を継承してほしい。
18	金武町	現在、ウチナンチュ大会は沖縄でしか開催されていないが、もし、カナダ・米国・仏国・亜国e t c でミニ大会が催せられたら。沖縄には、一世の場合、5年毎に帰ると「もう、又、帰って来たのか?!？」とあきれられるので…。
19	金武町	特にはない。
20	金武町	子弟の研修制度の継続してください。
21	Itariri市 (金武町)	ウチナンチュ大会を今後とも続けてほしい。研修制度を是非続けてほしい。若い子弟のスタディーツアーができたのもっと良い。
23	佐敷町	沖縄のことは忘れられない。
24	佐敷町	育つてはブラジルがまし。
25	佐敷町	沖縄の変化は早い。ビラ・カロンは青年会がある。
27	佐敷町	年に一回の新年会に県沖縄からも参加して下さればよいと思います。
28	国頭村	郷友会の敬老会では80才以上に敬老会（現在は米15K袋）（3,000へアイス）を提供している。それを母村で負担できないか？村長に要請したが返事はない。
29	羽地村	米軍基地をなくして平和な沖縄になってほしい。
31	那覇市	子孫のために研修制度を続けてほしい。
35	那覇市	世界のウチナンチュ大会を今後続けてほしい。なくさないで下さい。県費留学生制度、市町村研修制度を絶対になくさないで下さい。
39	Promissao市 (那覇市)	方言を理解することが難しい。二・三世は歌えても意味が分からない。意味が分かるように交流を活発にしたい。
41	読谷村	将来のブラジルと日本との国際交流を通して日本とブラジルとの架け橋を留学制度や研修制度が。
42	読谷村	留学研修制度は、母県、母村は、今後とも継続を役づけていただきたい。母県の総ての文化やその活動のため、ウチナンチュ大会は継続してもらいたい。
43	読谷村	留学、研修制度は、母県、母村は、今後とも継続を必ず行っていただきたい。母県の総ての文化やその活動のため、ウチナンチュ大会は継続してもらい、出来得れば、国廻りで行っては如何？
44	読谷村	世界のウチナンチュ大会が何日までもつづく事
47	読谷村	ウチナンチュ大会はいつまでも続けて下さい。
50	具志川市	イベントに対して母県や母村は支援してもらいたい。
52	具志川市	奨学金制度を続行してもらいたい。
53	具志川市	ブラジルと母県との交流をさかんにし、伝統文化の継承を守り子孫にウチナンチュの誇りをもち続けていただきたい。問題点は世代交代（3世、4世、5世）のウチナンチュ意識がうすれる可能性がある。
59	沖縄市	今後とも毎年研修生をお願いしたい。郷友会の役員は一生懸命だが会員が集まらない。
73	今帰仁村	沖縄県とブラジル国の県人会と何時迄でも交流して…。

No.	出身地	自由記述
76	大宜味村	子や孫たちがこれまで通り母県との繋がりをもち、歴史、習慣、伝統を守っていけるように願っております。
77	大宜味村	村人会の行事に二世・三世の参加者が少なく、無関心で将来村人会郷友会はなくなることと思う。
78	名護市	今まで通り研修、留学といった活動を続けてほしい。ブラジルの沖縄人を忘れないでほしい。
83	本部町	もっと絆を深めるための行事をしてもらいたい。
86	宜野座村	県人会をもっと密にしてもらいたい。
87	金武町	青少年交流をもっともっと深めてほしい。
92	読谷村	県においては、県費留学生、研修生の制度を続けてほしい。南城市においては、昨年初めて研修生を送りましたが、今後も是非続けてほしいです。今の子どもたち（小学・中学生）は、日本にすごく関心があり、日本語を勉強する子どもたちが多くなってきているように思います。
95	中城村	ブラジルも移民が来て100年になるので、二世・三世を受け入れてもらうだけでなく、ブラジルも制度を設けて、沖縄県の若者を受け入れるべき。
98	那覇市	できるだけ郷友会活動は続けてもらいたい。
101	知念村	母県との絆を深めるよう行事をもっとやってもらいたい。
102	東風平町	沖縄について、もっと絆を深めてほしい（青少年交流）
104	石垣市	県費留学制度をこれからも続けてほしいと思います。
108	Avaré市	2～4世は、生まれた市町村が分からなくなる。だからブラジルに到着した人の名簿を作成することが必要。沖縄はよいところ。「お帰りなさい」と言ってくれる。

とができる。そして世代を問わず、沖縄人の絆が三線やエイサー、カチャーシー、舞踊といった伝統芸能によって強化され、同時に母県とのつながりも生み出していることを指摘しておきたい。

#### 4. 移民100年とこれからの沖縄移民社会—まとめにかえて

海外に在住する移民の記事が毎日のように新聞に掲載されるのは、全国広しといえども、沖縄のみであろう。このことは、親戚や地域のなかに、移民した人々が数多く存在し、海外移民の一世、二・三世等との関係が深く、市町村史や字誌における移民編の編さんが盛んなことや、新聞・テレビ・雑誌などマスコミにとっても、移民事象は大きな意味をもつものであることを物語っている。戦前・戦後を通じて、沖縄からの移民は、現在一世から六世までその数36万人といわれている。

2008年8月、ブラジル沖縄県人移民100周年記念祝賀祭典が、約1週間にわたり開催された。母県から約700人、アメリカやペルーなど世界各国の県系人ら約1,500人が一堂に会し、ブラジル日系社会の礎を築いた先人の功績をたたえ、一世紀の節目を祝福した。母県で迎える「世界のウチナーンチュ大会」とは異なり、沖縄側が慶祝団として迎え入れられ、祝賀行事では「分家」が「本家」に対して沖縄の伝統文化・芸能を披露し、移民社会に継承される「沖縄」の伝統を強く印象づけたものであった。しかし、それらブラジルの沖縄文化は、異文化のなかで失われてしまう危機感を

持って、継承されてきたものであり、沖縄を自明とする沖縄の人々よりも、より一層自覚的なアイデンティティを形成しているように思われる。「本家」が必ずしも「分家」よりも自覚的であるとは限らないのである。

これからの移民社会と母県との関係を考えるために、移民送出社会の母県・母村の役割と課題について整理し、まとめとしたい。

まず一つに、移民教育の必要性である。今日のグローバル化という世界規模での国際化・情報化社会の進展は、外国を身近に感じ、海外在住の沖縄移民社会やその文化を知ることが可能にし、交流の機会も日常的なものになってきた。しかし、この日本から多くの移民を送出した事実は、学校教育において教えられることは希である。今日の沖縄社会が、戦前の困窮、戦後の荒廃から立ち上がったのは、多くの在外県系人からの惜しみない支援によるものである。移民開始から100年を経て、その記憶は薄れつつある。一方で「棄民」として国策によって切り捨てられた人々の告発も起こっている。さらには、日系人による出稼ぎが社会問題化し、日本と日系社会の関係は、グローバル化のなかで難しい対応を迫られている。

二つめに、沖縄移民社会は、母県・母村との共同関係にあるため、母県・母村の変化は、直接的に移民社会へ影響を与えるということである。今日の市町村合併がその典型事例といえる。たとえば佐敷町、知念村、玉城村、大里村が、2006年1月1日に南城市として合併したために、ブラジルの各町村人会も、翌年「南城市民会」として合併することになった。100周年記念

祝賀行事で、南城市民会では、来伯した南城市長を初めて迎えたことで、実感をもって母村とようやく一体となり、今後も交流を促進することを直接確認し合ったのである。その他にも、海外移住者子弟研修制度廃止の問題もあり、合併問題は、当事者の市町村だけではなく、遠く離れた国内外の市町村人会にも影響を与えている。それは言い換えれば、自治体がなくなれば、市町村人会もなくなることであり、故郷の喪失は郷友会の消失という、不離一体の関係であるといえる。

三つめに、母県・沖縄の問題である。前述したように、移民送出社会の沖縄は、「本家」として存在しながらも、時には「分家」からの経済的支援や交流を通して、様々な示唆を受けてきた。移民社会は、異文化のなかで、ディアスポラ・コミュニティとして沖縄をよりどころに生活している。その中心が、県人会の活動であり、沖縄文化の継承に組織を上げて取り組んでいる。また、お互いに助け合うユイマールの精神は、移民体験を通して培った教訓であるように思う。そのような精神だけでなく、移民社会が大事にしてきた沖縄人意識や言葉、生活習慣は、母県・沖縄において希薄化しているというのが事実である。

「本家」の正統性は、もはや疑いをもって見なければならぬ。自ら自信をもって「沖縄人」と言うブラジルの県系人を目の当たりにすると、沖縄一世である自分は、何を語るのか、「本家」としての無自覚を自覚化せざるをえないのである。移民創出の原因である米軍基地問題をはじめ、埋め立てによる環境破壊、リゾートホテルの乱立などの沖縄問題は、沖縄人の当事者意識の希薄化が影響している。自ら問題を切り開いていく精神を、移民社会から学ぶべきことは多い。

最後に移民社会の持続可能性についてである。移民社会は、一世が築き上げた伝統を、これからの世代が継承し、創造することによって持続可能となる。それは、ブラジルの移民社会だけの問題ではなく、鋭く母県・沖縄のシマ社会にも通ずる課題でもある。

本研究は、科研費（17730458）の助成を受けたものである。

- (1) 本研究のこれまでの成果については、次の論文と学会発表で報告している。「沖縄における郷友会の形成過程と今日的展開」熊本大学教育学部紀要

第56号、2007年、「ブラジルにおける沖縄移民社会の形成と文化伝承の構図」同左第57号、2008年、「在伯郷友会と母村・沖縄との共同関係に関する一考察」九州教育学会第58会大会発表、2006年、「ブラジルにおける沖縄移民社会と青年隊の展開－移民100年を経て－」日本社会教育学会第55会研究大会発表、2008年、「ブラジルにおける沖縄移民社会と自治公民館」日本公民館学会第7回研究大会発表、2008年。

- (2) 調査実施にあたり、山城勇氏、宮城あきら氏、大城栄子氏には移動・調整・代筆などで多大なる協力を得た。
- (3) 分析内容によっては、二世の回答を外したものもある。たとえば移民した状況については、当事者でないため、一世のみの回答を採用している。
- (4) 1954年、琉球政府が米国政府とボリビア政府の支援を得て始めた計画移民のこと。1964年の第19回までに3,221人が移住した。最初の入植地（うるま移住地）は、熱病の発生と河川の氾濫による水害により、移動を余儀なくされ、ブラジルの親族を頼って、ブラジルに再移住したボリビア入植者も多い。
- (5) 田中克彦『ことばと国家』岩波書店、1981年、26頁。
- (6) 中本正智『日本語の原景－日本列島の言語学－』力富書房、1981年、198頁。
- (7) 詳しくは、琉球新報社『2006 沖縄県民意識調査報告書』2007年を参照のこと。
- (8) 野入直美らの共同研究によると、ブラジルの県系人は、ウチナーンチュ意識が高く、日本語能力も高い傾向にあるという調査報告を行っている。その理由として「中南米、とくにブラジルにおいては、戦後移民1世が県人会活動の中核として健在であることが挙げられる」と指摘している点は、本調査の結果と合致している。詳しくは、野入「『世界のウチナーンチュ大会』と沖縄県系人ネットワーク（4）－中南米からの参加者の特徴を中心に－」琉球大学移民研究センター『移民研究』第5号、2009年、を参照のこと。
- (9) 沖縄県人会の支部は、沖縄人の集住地を中心に、2009年現在で44支部が活動を行っている。具体的には、サンパウロ市内16支部、サンパウロ州内24支部、サンパウロ州外4支部となっている。
- (10) 金武町人会は、1971年に字金武・並里同郷会として発足したが、金武村が町になった1986年に、字伊芸、屋嘉を加えて町人会となった。会員は、100～110世帯ほどが加入している。